



# 祝樋口真吉生誕210年

## 樋口真吉顕彰会・会報誌

発行人  
会長 土森正一  
文責 寺尾敏夫

### 樋口家の身分は「新足輕」から出発していた！

土佐藩身分制度		信四郎	真吉
上士	馬廻		
	馬廻末子格		
白札	留守番組		
	陪臣		
	白札		
	白札格		
	郷土御用人		
	郷土		
	用人		
	用人格		
	徒歩		
	徒歩格		
下士	組外(くみはずし)		
	のち組外		
	三人扶持		
	白銀細工人		
	銀見役		
	(下横目)		
	下代類		
	足輕		
	新足輕		
	履足輕		
庄屋	下士		
	大庄屋		
	庄屋		
他	僧侶		
	地下医師		
	百姓		

●樋口真吉は1815年中村に生まれたので2025年で生誕210年を迎えた。今回は改めて真吉の生涯をたどってみます。

●樋口家とは渋谷雅之先生の「樋口真吉日記」に「信四郎は安永五年長岡郡大津村に生まれた。ここは樋口家の祖先定住の地である。代々藩の卒族で、・・・とある。この「大津」が中村の一条兼定の嫡子内政が長曾我部元親の命で住した大津御所の「大津」であるならば、内政と共に何家族か家

来衆が同行していたはずで、その中に樋口家が居た可能性が否定できない。現在四万十市下田に在住する樋口家は先祖が伝聞で1468年に一条教房公と共に京都から来たといえる家なのでその仮説はありうるかもしれない。

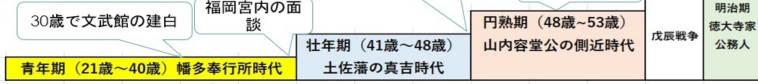
●信四郎が土佐藩の募集に応じて新足輕に採用され中村の幡多奉行所に赴任してきた。その新足輕の樋口家に真吉が生まれたのである。当時の土佐藩の身分表からすると信四郎は人格円満で職場でも表彰

### 龍馬との秘話を中心に！

を受け、剣術の弟子達からも慕われていたとされ、新足輕から組外しにまで身分もアップしていたとされている。藩に於いてこの親子がどんな思いで生きて行ったのか興味深い。この親子は剣術と砲術に長けており、真吉は23歳にして九州の大石新影流免許皆伝を得ている。真吉は30歳で父級の居ない中村の特殊

### 真吉が歩んだ土佐藩の階段はこんな「階段」でもあったのです！

#### 樋口真吉の生涯



和暦	西暦	記事	年齢	樋口真吉
■ 天保8年	1837	大塩平八郎の変	23歳	★第一回回国の旅：長崎訪問：柳川藩大石新陰流に入門し29日で免許皆伝授与。
■ 天保11年	1840		26歳	★第二回回国の旅：九州へ剣術修行
■ 天保14年	1843	Aヘン戦争	29歳	・清国が英国に負ける！
■ 弘化元年	1844	オランダ国王開国を勧告	30歳	父高齡の為代動
■ 弘化2年	1845		31歳	★第三回回国の旅：大坂京都の旅
■ 弘化4年	1847		33歳	★第四回回国の旅：鎮西三遊の旅九州へ
■ 嘉永2年	1849		35歳	父信四郎死去 土佐藩「海防令書」海岸守備地区と委員指名。 ○文武館建設の建白書提出(第二回)
■ 嘉永3年	1850		36歳	坂本龍馬(源川の河川改修工事)と幡多奉行所で逢う
■ 嘉永5年	1852	佐賀藩反射炉築造	38歳	★第六回回国の旅：中村→長崎→博多→江戸→帰郷の長期旅行 長崎でジョン万次郎に面会/大坂から佐々木高行が合流/江戸で佐久間象山に学ぶ
■ 嘉永6年	1853	ペリー浦賀来航	39歳	4月福岡宮内中村に末航、面談を受ける。11月歩行格に昇進
■ 安政元年	1854	日米和親条約	40歳	下田など幡多郡17か所に砲台設置・民兵募集/入場で銃砲操練始まる。
■ 安政2年	1855		41歳	○6月文武館完成 →藩政記録に記載がない。
■ 安政5年	1858	海防令書	44歳	文武館の教壇に立ち後進の指導に従事・後藤象二郎が幡多奉行に赴任
■ 万延元年	1860	桜田門外の変	46歳	香美郡奉行所に奉職後、高知文武館の立上げ役に就く(白札以下剣術寄合権古世話役)
■ 文久元年	1861		47歳	9月帰国した武市半平太と会う。土佐勤皇党結成
■ 文久2年	1862	生麦事件	48歳	3月龍馬脱藩 高知の文武館開設・中村の文武館は敬止館と名称を変える。
■ 文久2年	1862	生麦事件	48歳	4月8日執政吉田東洋暗殺。

### 龍馬との縁

●龍馬が渡川の治水工事の補助役で中村に来ていたことが確認されている。幕末の体制奉還で注目を浴びた後藤象二郎も若干二十歳で

事情から海防体制に備えるために藩校文武館の設立に奉行所挙げて邁進していた様は左記の年表に明らかである。十年を要したが文武館を無事完成させた。

幡多奉行として中村に赴任してきた。後藤は既に完成して稼働している文武館の実態を藩の執政吉田東洋に報告したので吉田東洋は高知にも文武館を創ることを決定、文武館の名前まで高知に取り上げて中村は敬止館と名称を替えしかも樋口真吉を高知へ転勤させて高知文武館の準備をさせる人事を発令した。その時真吉は「白札以下剣術寄合権古世話役」

藩の道場で剣の指導をしていた。この機会に真吉は龍馬に剣を指導した可能性がある。この接触が文久2年に大坂の街での再会を可能にしたと見ている。このように吉田東洋は強引なやり方をする執政であった。丁度江戸から帰省した武市瑞山が土佐勤皇党を立ち上げたのを目撃した真吉はそれを加わっていきな





和暦	西暦	記事	年齢	樋口真吉 関連記事
■ 慶応3年	1867		53歳	4月徒士目付役格式御用人拜命、上京する。
		薩土密約		6月13日「坂本龍馬來ル」と書き、京都藩邸で再会。西郷隆盛を相国寺に訪問。
		薩土盟約		7月中岡慎太郎と頻繁に行き来する。
				8月外交掛り御用を拜命
		大政奉還上奏		9月西郷隆盛、大原綱と頻繁に行き来する。
<b>第3期幕末期</b>				
				10月18日龍馬から望月清平宛ての手紙に真吉に隠れ家を見つけるよう伝言
				11月15日龍馬・慎太郎暗殺され、翌日真吉は現場検証
■ 慶応4年	1868	鳥羽伏見の戦い	54歳	1月伏見戦争始まる。真吉砲車を引いて参戦し薩摩の吉井勇に出会う。
(明治元年)		戊辰戦争		錦旗を土佐へ運ぶ途中神戸で奪われるも取り返し、川之江で迅衝隊に届け。
				2月迅衝隊に加わって戊辰戦争に本格参入
				山梨で乾退助は板垣退助と改名、近藤勇軍と戦い捕縛。
				4月〜5月軍夫募集のため英国船を借り帰国、わずか1か月で300名を充足させた。
				6月江戸に出て新政府の大村益次郎から軍資金を得て横浜で最新式銃器を調達、白川の戦いに苦戦する政府軍に補充して貢献し、新政府軍総督府から感謝状を得た
				6月江戸でジョン万次郎と再会し飲む。
				10月会津戦争では真吉も銃を持ち戦い勝利、土佐藩の軍は凱旋した。
				11月明治天皇に拝謁慰勞され高知に船で帰還した。
■ 明治2年	1869		55歳	2月長州及び薩摩に出張する。
				11月徳大寺家公務人を拜命
■ 明治3年	1870		56歳	1月明治天皇から従七位に叙せられる。
				6月14日東京麻布の客舎にて病没、麻布徳生寺に葬られた。
■ 明治36年	1903			従四位が追贈され、中村の羽生山に改葬された。

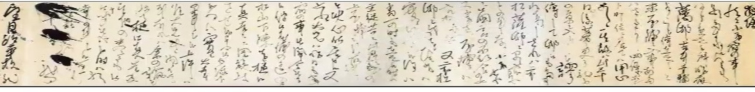
●真吉は5月4日浦戸から船で京に向かった。幕末の舞台に間に合ったのである。6月13日に龍馬と後藤象二郎が長崎より薩土盟約の為に上京して真吉は日記に「坂本龍馬來ル」とフルネームで書いた。大坂以来の再会だった。話が弾んだことであっ

たろう。10月に龍馬から望月清平宛ての手紙に真吉に京の隠れ家を捜して欲しいとの伝言が書かれていたが、真吉には伝わっていなかった。11月15日真吉は悲報を受取った。龍馬と慎太郎の暗殺である。現場検証をしたのが真吉であった。ここから一気に討幕へ時代が動いた。正月

明けると鳥羽伏見の戦いが開始され、真吉も二十名の兵を連れて大砲一門を引いて戦場にでたと日記に記載があるが、土佐藩の討幕派の主たる指揮官は板垣退助は土佐で準備中、佐々木高行は長崎、そんな中土佐藩は百名の兵が参戦したとされる。そして正月12日朝廷は容堂公を招き、鳥羽

伏見の戦功を賞して、賞金一万五千両、太刀大小を下賜したという。明治政府の土佐藩への必死な思いが伝わってくる。しかるに宇和島藩伊達宗城公は千名の兵を率いて京都御所の守備をしていたが、鳥羽伏見へは一兵も出さなかつた。明治政府は明治元年7月伊達宗城公に帰藩を要請して二

**1867年慶応三年10月龍馬が望月清平宛ての手紙にて真吉に隠れ家を見つけるよう依頼した！**



龍馬は望月に宛てた手紙に「樋口真吉に隠れ家を見つけるよう頼んで欲しい」と依頼しているが、この伝言は、真吉には届かなかったとされている。  
隠れ家の斡旋を依頼するのだから、少なくとも真吉は龍馬から全面的に信頼されていた証ではないだろうか。



土佐藩の戦功を賞して下賜された太刀  
方 宗 尚  
明治元年(1868) 11月  
土佐藩の戦功を賞して下賜された太刀。方宗尚が所蔵している。この太刀は、土佐藩の戦功を賞して下賜されたものである。方宗尚は、土佐藩の戦功を賞して下賜された太刀の所有者である。

**鳥羽伏見の戦いは土佐藩はヤバかった？**



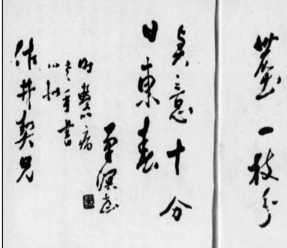
たしかに、竹に雀の高張り提灯がならび、宇和島藩兵が奮闘しているでは、グループに分けて詳細に見てみよう 81.4 X 143.2 cm



●総会は2月7日(土)に新ロイヤルホテルで17時から開催します。新市長・新教育長にもご参加頂きますので会員の皆様にはふるってご参加をお待ちしています。  
●光陰矢のごとしといいますが早いもので樋口真吉顕彰会も発会から8年を経過しました。続けること

**編集後記**  
の難しさをしみじみと感じています。そして昨年が樋口真吉の生誕210年でしたが、今年には180年忌祭を検討しなければなりません。(完)

度と宇和島藩に声を掛けることは無かつた。  
●明治三年徳大寺家に勤務していた真吉は病を得て辞職願いを出し、6月14日東京で息を引き取った。直前に見舞いに来た佐井寅次郎(娘婿)に与えた漢詩



謝人贈  
襟花  
水心又玉有  
何為染埃  
塵一枝分  
春意十分  
日東春  
南溟恵(印)

(真吉が南溟恵から貰ったもの)が左記です。郷里に継嗣鵬次郎3歳を残して死を迎えた樋口真吉の思いはいかばかりであつたらうか？享年56歳であつた。今郷里の羽生山に静かに眠っている。

